介 護 職 員 自 己 評 価 表

2024年10月23日

事業所名	デイケア リハビリセンター前之浜

	正社員	非常勤社員
理学療法士・作業療法士	7人	
看護師	4人	1人
介護福祉士	5人	
実務者･初任者研修	4人	1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	6.4%	73.6%	19.1%	0.9%	

前回の改善計画

超強化型老健として生活課題の解決に寄与するリハビリを提供している。転倒リスクの高いご利用者には体感を強める動的バランス訓練、歩行能力を高める必要があるご利用者には下肢筋力トレーニングや基礎代謝を上げる有酸素運動などを提供し、生活課題の解決にくわえて健康維持につながるリハビリを計画した。ご利用者の多くは身体機能の改善効果を感じておられ、積極的に参加されるなど、習慣性の獲得につながっている。中度認知症のご利用者の中には能動的な運動が困難な方があり、四肢や指先を受動的に動かす訓練をおこない、表情をAI解析した感情データを活用した支援を計画した。スタッフ教育は、認知症に係る社内研修、基礎代謝を高める運動に関する社外研修など、スタッフの学びたいに応えられるスキームを目標とした。

前回の改善計画に対する取組み結果

体感を強める動的バランス訓練、歩行能力を高める下肢筋力トレーニングや有酸素運動は、健康運動実践指導者を有するトレーナーを中心に提供し、可動域を広げるリハビリは理学療法士により提供した。施設内の転倒は大幅に減少し、動的バランス能力の向上が認められるご利用者が増えた。活動的に取り組むご利用者の増加は、かかわるスタッフだけでなく間接的にかかわるスタッフの意欲も高め、スタッフからの声掛けが増え、施設の雰囲気が賑やかになった。軽度の要介護状態の方では、外出や社会参加する機会の増加がみられ、取り組みを評価するご家族が増えてきた。スタッフスキルは、資格取得、社内外の研修やOJTでスキル向上を目指した。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	10.0%	50.0%	40.0%	0.0%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	10.0%	60.0%	30.0%	0.0%	100%
SECTION 3	食事について	10.0%	80.0%	0.0%	10.0%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	10.0%	80.0%	10.0%	0.0%	100%
SECTION 5	排泄について	10.0%	70.0%	20.0%	0.0%	100%
SECTION 6	入浴について	10.0%	80.0%	10.0%	0.0%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	10.0%	70.0%	20.0%	0.0%	100%
SECTION 8	服薬について	0.0%	80.0%	20.0%	0.0%	100%
SECTION 9	意思疎通について	0.0%	80.0%	20.0%	0.0%	100%
SECTION 10	行動障害について	0.0%	80.0%	20.0%	0.0%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	0.0%	80.0%	20.0%	0.0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

一人とひとりに適するプログラムを検討し、多くのご利用者にリハビリや機能訓練を取り組んでもらった。リハビリや有酸素運動など、身体機能の維持回復に向けた機能訓練は、概ね提供できたが、在宅での暮らしぶりを踏まえた具体的な生活課題の解消には検討を要した。理由のひとつに、在宅生活の課題把握が十分でなかったことが挙げられるが、施設と在宅との生活の違いを反映させることの難しさがあった。日々の暮らしを変容させるに足る意欲を引き出す取り組みが問われていた。生活の広がりを示すスコアに上昇が認められたことから、活動量、特に下肢筋力の増加が在宅生活に寄与したと考えられた。意欲に影響を及ぼす支援として、回想療法や表情解析に基づくSOLOデジタルセラピーを通して、興味の湧く心理療法の提供に努めた。一方、重度要介護状態のご利用者では、能動的な訓練が難しいケースがあり、受動的なリハビリや四肢運動等に頼らざるを得なかった。スタッフ教育は、理解度や意欲に個人差があり、個別指導を検討する必要があった。

主任 板木雅俊

外部評価者

超強化型老健に併設している特徴を活かして、老健と同じ理学療法士が担当できる仕組みが整備されていました。在宅復帰後のリハビリを退所前に検討し、一貫を持たせることで効果につなげていました。個別リハビリをはじめ、健康運動実践指導者による歩行訓練や有酸素運動により身体機能の向上が図られ、意欲と心理的安全性の確保を心理療法により目指していました。声掛けや回想療法、表情を解析した心理療法などを用いて意欲向上を図っていることは評価できます。一方、在宅生活の把握に課題があるとされ、施設ではできている行動が在宅ではできていない項目を検討し、原因として意欲の低さを挙げていました。一般的にみると、新たな行動を定着させるには、①モチベーションの持続、②新しい行動への慣れ、③環境の影響などを検討する必要があります。新しい習慣の獲得には、心身に大きな負担がかかり、最初に違和感を覚えることがあります。反復した訓練を粘り強くおこなうことが大切です。最初はやる気があっても、時間が経つとモチベーションが下がることがあり、モチベーションを持続させる為の取り組みが必要になります。声掛けや心理療法によりモチベーションを高めているようですので、取り組みの継続をお勧めします。職員教育は、理解度や意欲の個人差から、個別課題に寄り添った個別指導が必要なようです。総合的な評価は、利用者の状態を測定し、ひとり一人に適した専門的な支援が提供されていることが推察されました。今後も地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0151 鹿児島県鹿児島市光山 2丁目 3-56
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
博 士（社 会 福 祉 学）　岩 埼 房 子